

全学英語教育の構築と英語空間創設の取り組み

英米学科 宮浦 国江

1. はじめに

平成 19 年度から始めた英文学科・英米学科の教員による本学英語教育拡充の試みは、今年度、次のような課題に取り組んだ。

- (1) 最重要課題として、平成 21 年度からの全学英語教育体制づくり
- (2) それに関連して、英語能力テストの試行・検討・決定
- (3) 教育 GP 申請「探究力・発信力を英語卒論に結実させる教育」
- (4) 英語科目担当教員の研修
- (5) 学内英語空間創設の試み…多様な英語学習支援
 - 英語コミュニケーション能力テスト(CASEC キャセック)全学受験
 - 英語連続セミナー
 - 多言語競演レシテーション大会
 - 「日米学生テレビ会議」
 - 「英語をすらすら読もう」英語多読のすすめ

以下で、それぞれの取り組みについて報告する。

2. 全学英語教育の構築

英語教育共同研究室(E406)での定期的ミーティング、英文学科・英米学科合同会議、外国語科目作業部会、教育研究委員会、英語科目担当者の集い等の議論を経て、別添資料「平成 21 年度からの新県立大学全学英語教育」のように、新体制が構築された。

要点として、次の点が上げられる。

- a. プレイスメント・テストによる習熟度別クラス編成
- b. ①グループ(外国語学部)<月・木>と②グループ(日本文化学部・教育福祉学部・看護学部・情報科学部)<火・金>に分割

以上 2 点により、習熟度や関心に応じた授業を展開しやすい環境が整えられた。

- c. 週 2 コマの授業の特徴づけ

English for Academic Studies と English for Interaction

d. English for Interaction における洋書系テキスト推奨

e. English for Interaction における評価

学期はじめのプレイスメント・テスト同様に、学期末に統一テストを実施し、その成績を 50%、教授者による評価を 50%とする。(検討は継続)

3. 英語コミュニケーション能力テスト(CASEC キャセック)利用

全学英語教育の新体制づくりの議論の中で、クラス分けをいかに行うかは重要な課題であった。入学式から授業開始までの短い期間に、混乱なくかつ教育効果の上がる形で、5学部8学科計570人をクラス分けするための方策を昨年度から引き続き検討し、多様な観点からCASEC利用を決定した。その際、開発協力校としてCASEC導入検討制度を利用した(2008年7月～2009年7月、84万円)。他のテストとの比較については、19年度報告書を参照されたい。

本年度は、7月に「英語インターミディエイトⅠ」「英語インターミディエイトⅡ」のクラスを通じて、またポスター等により全学一斉受験を呼びかけた。結果全学で454名が受験し、平均点は577.5点(1,000点満点、TOEIC換算で568.9点)であった。

7月一斉受験結果を、21年度からの習熟度別クラス編成の基礎資料とする予定であったが、受験者数が少なかったため、10月に再度全学受験を呼びかけた。今回は、「英語インターミディエイトⅠ」「英語インターミディエイトⅡ」全クラス履修者に受験を義務づけた。その結果、1151名が受験し、平均点は549.8点であった。この受験結果の分析に基づき、①グループ、②グループ内での「上級」「標準」「基礎」レベルのクラス数を決定した。

公的には、外国語科目作業部会(2008年10月20日)において平成21年4月にCASECによるプレイスメント・テスト実施が決まり、教育検討委員会(2008年12月3日)でも了承され、さらに、22年度以降も継続してCASECによるプレイスメント・テストが保証されるよう今後大学経常予算措置がなされるべきであるとの方向性が確認された。

4. 教育GP申請

昨年度来の英語教育拡充の試みを母胎として、平成20年度に新設された教育GPに「探究力・発信力を英語卒論に結実させる教育」を申請した。

取り組みの概要

英米学科は、1966年の創設以来、高度な英語運用能力と英米文化圏の文化や社会への理解を備えた国際的視野をもつ有為の人材の育成を目的とし、すべて英語で行う段階的英語教育プログラムを基盤に、イギリス地域・アメリカ地域・イギリス文学と文化・アメリカの文学と文化・英語学/英語教育の5分野の専門知識を深め、その総まとめとして英語による

卒業論文を、一貫して必修として課してきた。各英語科目では、英語コミュニケーション能力を段階的に高めていくだけでなく、常にテーマについて深く探求し、自分の見解を構成し、発信する力の養成にも力点を置いている。卒論のコンテンツを支える5分野の専門科目においても、体系的な科目構成により知識・理解を着実に深化させるだけでなく、英語の情報収集能力を活かしつつ、自らの設定した課題に向けて自律的探求力をつけ、レポートにまとめる訓練を重ねて、3年次後期から卒業論文作成を視野に入れた指導を行っている。このように、英語教育と専門教育に連結性をもたせた教育実践によって、英語卒業論文を、学士課程教育の学習成果として機能させてきた。

また英米学科は、平成21年度に予定されている文学部英文学科との統合により、本学の三層の英語教育(英米学科専門英語科目、外国語学部他学科向け英語科目、他4学部向け英語科目)を担当することになり、それぞれの層における英語教育拡充を目的として、平成19年度から理事長特別研究費による「新英米学科による英語教育」プロジェクトを進めてきた。

本取組は、英米学科の長年の教育実践の伝統と、昨年来の英語教育拡充の試みの上に立って、英米学科専門英語教育の体系化・リソース化・可視化をいっそう明確にし、同時に、高い運用能力をもつ英米学科の学生を、学内英語教育の有力な推進者として位置づけ、ENGLISH SPACE(学内に設置予定の英語のみを使用する多目的英語学習スペース)や英語連続セミナーなど多様な学内英語空間での活動をリードする存在として育成することを目的とする。このことは、英米学科の学生にとっては英語使用機会の増大となり、かつ全学的な英語学習への機運を高め、学生の自律的学習支援ともなるものである。

本取組では、以下のような教育活動・研究活動を展開する。

(I) 英米学科専門英語教育の拡充—体系化・リソース化

- ・成長型データベースの構築による英語科目別段階別到達目標明確化・共通教材開発
- ・英米学科英語科目群と専門科目群の有機的構造構築

(II) 卒業論文作成のプロセス支援とプロダクト共有化・可視化

- ・卒業論文作成ハンドブックの全面的改訂
- ・中間発表会、英語での分野別卒論発表・討論会、学科卒論発表会

(III) 学内英語空間創設

・ENGLISH SPACE創設と活動(DVD鑑賞とディスカッション、英詩・英語絵本朗読会、読書会、海外研究者によるミニ講演会、多読用図書、海外協定校とのTV会議)---英語授業との連携

・プレイスメント・テスト/アチーブメント・テスト/学習支援としてのコンピュータによる英語コミュニケーション能力テスト

結果は不採択であったが(採択率15.7%)、質の高い大学教育等推進事業委員会からの審査結果には、本取り組みの「趣旨について評価できる」とあった。改善すべき点については、この取り組みによって身に付けられる力が社会のニーズや学生のニーズにあったものが明確にすること、評価のための具体的指標を設定すること、との指摘を得た。今後それらの点を考慮して、再度申請し、本学英語教育の一層の拡充を図りたい。

5. 英語科目担当教員の研修

英語教育共同研究室(E406)では、昨年度に引き続き、2008年度英語科目のシラバス・デ

ータベース化、教材リソース化を行った。また、来年度からの新体制づくりが進行するに伴い、新機軸である English for Interaction 用の洋書系テキストや副教材を整備した。

また、昨年度に引き続き、英語科目担当者の集い(全学英語教育)を 2009 年 1 月 28 日に開催した。専任 14 名(英文 6 名、英米 8 名)、非常勤講師 15 名、計 29 名が出席した。予め郵送しておいた新教育体制について、説明・質疑応答を行い、「英語 B」の評価について当面の方針を決定した。各教授者からの授業報告と活発な意見交換が続いた。最後に、英語空間創設の試みについて報告とさらなる積極的参加を依頼した。閉会後も、何人かの先生が、E406 で推奨テキストを実際に手にとって比較検討したり意見交換を続けた。

この英語科目担当者の集いにおいて、昨年同様「教授者コメント」原稿依頼を行い、欠席者にも集いの報告を送りその中で依頼した。

開始 2 年目にして、教材を借りていく、シラバスや教育内容データベースを見る、視聴覚教材を視聴するなど、少しずつ英語教育共同研究室の利用が増えてきた。一同に会しての研修は年に一度であっても、共同研究室があることで、各自が自由にリソースを活用し、研修を行えるようになってきていると言えよう。

6. 学内英語空間創設の試み…多様な英語学習支援

6.1 英語コミュニケーション能力テスト(CASEC キャセック)全学受験

導入検討制度を利用し始めてからの各月受験者数と全学平均点は以下の通りである。

	当月受験者数	累積受験者数	当月平均点[A] (1000 点)	[A]TOEIC 換算点 (990 点)	累積平均点[B] (1000 点)	[B]TOEIC 換算点 (990 点)
2008 年 7 月	454 人	454 人	577.5	568.9	577.5	568.9
2008 年 8 月	47 人	501 人	602.9	572.4	579.9	569.2
2008 年 9 月	15 人	516 人	658.3	641.7	582.2	571.3
2008 年 10 月	1151 人	1667 人	549.8	504.7	559.8	525.3
2008 年 11 月	70 人	1737 人	628.9	601.4	562.6	528.4
2008 年 12 月	16 人	1753 人	616.9	585.3	563.1	528.9
2009 年 1 月	177 人	1930 人	645.4	621.2	570.6	537.3

上述の通り、7 月と 10 月は全学受験の呼びかけをした月である。受験生は主に、一般が国語としての英語を履修している 1 年生と 2 年生である。2009 年 1 月は、開発協力校として CASEC テストとリーディングテストを実施する必要があり、英文学科と英米学科の 1 年生、2 年生に受験させた。英米 1 年生(昼・夜)は、1 月 20 日 English Phonetics の授業時間を利用しての全員受験、英米 2 年(昼・夜)と英文学科の学生は、1 月 21 日水曜午後に受験可能の学生のみ。

7 月から学内に CASEC 受験案内のポスターを掲示し、学務課カウンターにも受験案内

を置いた。しかし周知徹底は難しく、自主的に受験する学生は少ない。ただ、そのような学生は、総じて平均点が高く、今後この層を増やしていくことが本学英語力の引き上げにつながる。

6.2 英語連続セミナー

今年度後期に、一般教育科目「特別講義Ⅱ」として、「グローバルな視野とコミュニケーションのための英語連続セミナーⅡ」を開講した。詳しい報告は、別の機会に譲るが、昨年度に続く第2シリーズでは、一方で昨年好評であった学長による英国での体験談、武道を学ぶ留学生の話、日本英語教育の中枢を担う先生の話を用意し、他方、外資系銀行での勤務経験、生活習慣病予防、バードウォッチング、日本近代史、通訳案内業、南アフリカ NPO 活動、国際ジャーナリズムなど、一步専門に踏み込んだゲストの話も多く用意した。

受講生が120名を超えたのが影響したのか、今年度は質疑応答で進んで手を挙げる学生がやや少なかったが、英文エッセイは、毎回質の高いものが多く見られた。昨年同様、一週間以内に、ベストエッセイを Web で公開した。また英語の発話については毎週の質疑応答ではやや静かだったものの、最終回はディスカッションとし、2〜3人グループで自由に話し合ったあと(英語でも日本語でもよい)、各グループの代表に立って英語で発表させたところ、どのグループも次々と臆することなく最も印象に残っているレクチャーとその理由を述べていった。大学生にふさわしいレベルの口頭発表であった。

今年度受講生が、児童教育学科からの若干名の他は、外国語学部各学科と英文学科に集中し、それ以外の学部学科からの受講生がいなかったことは残念なことであった。次年度以降より全学的な参加が望まれる。

受講した学生からは、「英語の講義を聴く機会は初めてだったので不安だったが、興味深く聞くことができた」「少し分からない部分もあったが、だいたい理解できてうれしかった」という声が多数寄せられた。また、単位にならずとも来年度も聞きたいという学生もいて、このセミナーが本学英語空間の一つとして十分役割を果たしていると言えよう。

6.3 多言語競演レシテーション大会

今年度活動計画として、英語関連イベントの開催を挙げていたが、10月末〜11月上旬の「新・県大ファンファーレ」の中で、高等言語教育研究所主催のイベントとして「多言語競演レシテーション大会」として結実した。盛会となり、また出場者・聴衆としての参加者ともに有意義な会との意見が多く聞かれ、次年度以降も開催される見通しである。

英語関係では、英文学科と英米学科から各1組が出場した。英米学科に関しては、それに先立ち、学科ミニレシテーション大会が開かれ3年生が競い合い、その選考結果により本選出場者を決定した。来年度以降も継続されれば、学科として組織的に、3年次でのレシテーション大会出場に向けて1年次から段階的にレシテーション訓練をさせたり、また

学科ミニレシテーション大会を参観することで、目標を持たせることも可能となる。

6.4 「日米学生テレビ会議」

英語連続セミナーに名古屋アメリカンセンター館長や在名古屋米国領事館首席領事を招いたことが契機となり、今年度も「日米学生テレビ会議」(2008年11月20日)に本学学生が参加した。英米学科3年戸谷鉦一君が名古屋からの代表質問者となり、堂々と英語で内容的に高度な質問をした。その様子は同日、朝日新聞などで写真入りで報道された。

6.5 「英語をすらすら読もう」英語多読のすすめ

英語学習に **graded readers** (段階的に特定語彙数で書かれた読本)を使った多読が効果的であることは既に広く認められている。単に理解可能なインプットを増やすためだけでなく、学習者がレベルに応じたテキストを読むことで未知の単語に対しても辞書を引かなくても推論が働くようになる、さまざまなコンテキストで単語に出合うことで多義語の習得が自然に進む、一冊の本を読み切ることで達成感が得られさらに学習意欲が湧くなど、多くの利点が挙げられている。**Penguin** や **Oxford University Press** から6-7レベルで、様々なジャンルに渡って、学習者の興味を引きそうなカラー表紙の多読用図書がライブラリーとして出版されている。

昨年度から準備を進めてきたが、学内に常設スペースを作ることは不可能で、それ以外の開催方法を模索してきた。学術情報センターの多大なご協力を得て(利用規程を改正して頂いた)、図書館のグループ学習室を利用しての試験的開催にこぎつけた。

用意したのは **Penguin Readers 1** セット(レベル0からレベル6まで約200冊)---独自のラベルを付した、個人用記録ファイル---2種類の記録用紙、名前用シール、難易度別貸し出し簿、利用者名簿である。

案内は学内にポスター掲示、チラシ配布、図書館ホームページお知らせによって行った。

開催日と利用状況は以下の通りである。

2009年1月19日(月)	11:45~13:15	6名
	16:15~17:45	2名
1月23日(金)	11:45~13:15	6名
	16:15~17:45	7名
1月26日(月)	11:45~13:15	3名
	16:15~17:45	6名
1月30日(金)	11:45~13:15	6名
	16:15~17:45	6名
2月13日(金)	11:45~13:15	4名
	16:15~17:45	15名
3月18日(水)	11:45~13:15	
	16:15~17:45	

利用者はまだごく少数とはいえ、中にはすでに 150 ページ以上を読んだ学生もいる。また、希望者の声により、CD 付きの graded readers、CD ウォークマンとヘッドホン各 5 台を今年度予算で購入した。新学期からの定期的な開催(曜日を決めて週 1 回)を計画しているところである。

英語の本をすらすら読もう!!

*Let's Read English Books
without Tears or Dictionaries*

レベル別多読用図書を使って、英語の本を一冊読み終える充実感を味わいませんか。例えばレベル 2 は英語を 600 語知っていれば読める本です。小説だけでなく、映画スターの伝記などさまざまなジャンルの本があります。個人用の読書記録ファイルも用意しました。どなたでも自由にどうぞ。

場所: 図書館 2 階 グループ研究室 A

日時:

1月19日(月)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

1月23日(金)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

1月26日(月)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

1月30日(金)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

追加開室!!

2月13日(金)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

3月18日(水)、11時45分から1時15分、16時15分から17時45分

問い合わせ先: 英米学科 宮浦 国江
(kmiyaura@for.aichi-pu.ac.jp)

7. 今後の課題

今年度の活動から、課題として次の点が上げられる。

- ・ 広報の充実 CASEC は 2009 年 7 月まで本学学生であれば、「使い放題」という恵ま

れた条件にあるが、まだ全学生への周知は不十分のままである。また、多読のすすめにしても知れば利用を希望する学生は潜在的に多くいると思われるが、学内ポスターは効果が限定的である。個々の学生に直接届く手段がほしい。

・CASEC 継続利用の確保のための学内理解 現在は導入検討制度利用中のため、84 万円で使い放題であるが、現在のところ、2009 年 7 月以降の手当ができていない。2010 年 4 月のプレイズメント・テスト用は学務課から予算要求予定であるが、最低でも 2 学年分で 710 人×2=1420 回分、約 269 万円必要である。全学英語教育として理想的には、

1 年生 4 月プレイズメント・テスト

1 年生 7 月前期アチーブメント・テスト

1 年生 2 月後期アチーブメント・テスト=2 年次 4 月プレイズメント・テスト

2 年生 7 月前期アチーブメント・テスト

2 年生 2 月後期アチーブメント・テスト

と 5 回、3550 回分、約 600 万円が望ましい。CASEC はテスト水準にブレがないよう設計されているため、客観的な学習成果/教育効果の測定尺度として、継続的に利用するほど、その効果は大きくなる。経常的予算措置を確保したい。

・英語教育担当教員の研修支援、情報共有、役割分担 これまで 2 年間で、多少なりとも「本学英語教育」として語ることができるような状況ができてきたといえよう。時代のニーズ、学生のニーズに対応すべく、今後一層「個の努力」から「共同体としての努力」の方向を押し進め、本学英語教育拡充を図っていきたい。

・新英米学科専門科目としての英語教育 本年度、最重要課題として全学英語教育に力を注いできたが、新英米学科の英語教育も新たな科目、学科定員の大幅増加に伴う問題がある。英米学科の学生が、全学的英語学習活動の推進者の役割を健全に果たしてこそ、本学の英語教育の向上が図られるであろう。その点からも、英米学科学生向け英語教育の到達目標明確化、教授法・教材研究にも今後一層努力していく必要がある。

・学生のニーズ調査、学内からの意見聴取 本年度行う予定であったが、余裕がなく実施できなかった。今後、FD 委員会実施の学生による授業アンケートの他にも、独自に英語教育に特化した学生のニーズ調査、他学部、他学科教員からの意見聴取により本学にふさわしい英語教育のあり方を探っていきたい。